【優秀賞】

水と共に生きる

宮城県仙台二華中学校
三年　西原結花

辺りを見渡すと一面に広がるヨシ。ここは石巻市にある北上川下流域の河川敷。中学二年生の初夏、私はヨシの移植を体験した。

ヨシとは、北海道から沖縄までの日本全国の湖沼や河川の水辺に大群落をつくる大型の抽水生物である。イネやムギに似ているがその大きさは四m近くまでなることもある。実際に見たヨシは大きく空に伸び、私の背丈を優に超していることに驚いた。

北上川下流域は、東日本大震災をきっかけに大きく変わってしまった。以前は琵琶湖の湖畔と並ぶ国内最大級の群生地だったが、津波で多くが流され、それによってそこに生きる生物も影響を受けた。チゴガニやアシハラガニ、クロベンケイガニなどの底生生物が見られなくなったり、地盤沈下による河川の塩分濃度上昇によって国内有数の産地だったヤマトシジミも絶滅の危機に瀕したりした。

ヨシについて調べるうち、私はヨシが担ってきた多くの役割を知った。その中で最も注目したのは、水をきれいにするはたらきだった。それは水中の赤潮、アオコの発生に繋がる窒素やリンを養分として吸い取ること、土の中やヨシの水中の茎についている微生物によって水の汚れを分解すること、さらに水の流れを弱くし、水の汚れを沈めることだ。わずか三㎡のヨシ原で人間一人分の一日の汚水を浄化してしまうそうだ。まさにヨシ群落そのものが自然の浄化槽といえる。

水の浄化にはたくさんの労力がかかる。きれいな水を飲めるのは当たり前のことではないかもしれない。私の叔母が暮らすカナダへ行った時のことだ。水道の水を飲もうとすると、ミネラルウォーターを買うよう勧められた。先進国のカナダでさえ水道の水が飲めないことに驚いた。しかし日本以外の国で水道の水が飲めないのはめずらしいことではないようだ。世界には、水道自体が無い国も多い。水が身近にないために水くみのために一日何時間も費やし正当な教育の権利を奪われている人もいるそうだ。世界の約九人に一人が自宅から往復三十分以内で水くみができないという。日本の豊かな水資源を、当たり前だと思ってはいけないのだ。

水をめぐって困っている人たちが世界にはたくさんいる。どうすればよいか。私はこう考えた。地球上の九十七％以上を占める海水の利用だ。先日私が見たテレビ番組で、海水を工夫することで飲み水に変えているのを見て、これを利用できないかと考えた。調べてみると、もう既にその技術をもつ会社が日本にあることが分かった。それは逆浸透膜というフィルターシステムを使って不純物を含んだ水に圧力をかけ純水をつくる方法だ。一般的な浄水器とは不純物の浄化能力に違いがあるようだ。日本の技術は水問題を解決する希望の光だ。

もう一つ忘れてならないことがある。それは、これまで私たちに恩恵をもたらしてくれた自然を守っていくことだ。北上川のヨシ原は震災によって変わってしまったが、移植が続けられ、少しずつ元の風景に戻ってきている。しかしながら、ヨシを守る人々の高齢化が進んでいること、ヨシの価値や機能が広く認知されていないことは今後の課題だ。

私は今回、数株のヨシをわずかな時間で移植したに過ぎない。何か変わったかと聞かれれば、その変化は本当にわずかなものかもしれない。けれど、一本のヨシから、いろいろな視点で物事を考えることができた。日本が豊かな自然に恵まれ、その自然に育まれた水と共に生きているということ。そしてこれからも水をめぐる問題とは付き合っていかなければならないということ。全ての人が暮らしやすい世界になるように、未来を背負う若者としてこれからも考えていかなければならない。北上川はやがて海へと続く。海でつながった世界を私は見つめていきたい。